

里岩手の各駅で待っていた身寄りの者に次々に引き渡すという作業を、淡々と果たされた。私は東北本線花巻駅で、祖父の妹である伯母に引き取られた。杉沢先生らは花巻駅からさらに北へ向かわれた。

母は十一月初めに看病の任務を終え、私が引き取られていた母の実家に無事帰国した。母は舞鶴に上陸したそうである。

十一 忘れまじ満州

敗戦というのは、こんなにむごいものなのか。

平穏な家庭の七人家族のうち五人も外地で亡くし、私と母だけが残された。その母も実家に帰り安堵したのか、積もり積もった疲労のためか、脊椎カリエスにかかり、その後約十年患った。考えてみれば私たちの家庭は、敗戦とともに一年足らずのうちに破壊されてしまったのである。

敗戦間際に軍隊に召集され、敗戦と同時に捕虜となつてシベリアに送られた兵隊たちや、遠い孤島で玉砕した部隊も多くあつたとのことだが、開

拓団の中にも集団自決した事実もある。国策といわれ満蒙開拓に家族を挙げて入植した私たち一家も、悲劇として幕を閉じたのである。

戦争による敗戦は別としても、必ず双方に永く禍根を残す結果となるであろう。玉砕も集団自決も、ともにどんな思いで尊い命を捨てたのか。どんな戦争にせよ、戦争は永く人を不幸に陥れるものである。戦争は悲しいものである。忘れまじ満州、ノーモア満州である。

男装の捕虜

茨城県 加倉井 文子

一 おんなひとり

熱河省喀喇沁左旗建昌街と言われて、「ああそうか！ あそこか」とうなずける人は、永年にわたつて満州で活躍していた人でも、数えるほどしかいないだろう。錦州から承德を経て、古北口へ

延びる綿古線を凌源駅で降り、そこからバスで南へ約八十キロメートルの地点で、万里の長城までもさして遠くない山奥だ。だが、旗公署や諸施設の所在する、その周辺の中心地である。

「喀喇沁」とは蒙古語で「ハルチン」の音訳で、「見張りをするもの」という意味もあった。

さしずめ監視哨とでも訳するのであろうか。なお、日露戦史を彩るかの河原操子のいたのは喀喇沁右旗であって、建昌から東北方に約百キロメートルばかり離れた地点である。

昭和十六（一九四一）年、故郷の茨城県水戸市で結婚式を挙げ、みんなの歓呼の声に送られて主人に伴われ建昌に着いたのは、大東亜戦争宣戦布告の前日、十二月七日であった。

協和会旗本部事務長の職にあった主人は、たびたび侵入して来る八路軍を迎え撃つために、落ち着く暇もなかった。月の半分以上は、荷馬車や驢馬の背にまたがって、奥地や田舎に出張をしていた。その留守を、「ジー、ジー」と油を吸い上げ

て燃えるランプの下で、一人寂しく待つ私は、故郷恋しき、母恋しきに涙を流していたことも、最初のうちは毎日であった。協和会職員は、日本、中国、蒙古の人たちでみんないい人ばかりだった。そしてはるばる地方の分会からやって来る人も、気安く主人と議論し合っていた。

本部の指導班長の鄭さんは、主人が立法院に勤務していた当時の上司で、主人が協和会に入るとき、主人に従って長年の職を投げうってきた人で、私を弟嫁のように思ってくださいって、満州の風俗習慣などをあれこれと教えていただいた。私も、主人たちの仕事をおぼろげながら分かっていた、理解を示すようになってきた。

上海で生まれ、上海の女学校で北京語を習った私は、主人に直されながらもけっこう来客の相手が勤まるようになり、張り合いのある毎日を過ごしていた。

住民工作に出た主人が、八路軍に包囲されて通信連絡が途絶えるという驚きも味わったし、サイ

レンの合図で避難予定場所に退避しようとして、身の回りの物を詰めたりユックサックを背に、一晩中まんじりともしなかつた夜も幾夜か体験し、自分でも分かるほどだんだんとたくましくもなつていた。

二 中国人にかくまわれて

昭和二十年八月九日の突然のソ連軍参戦当時は、協和会の日本人職員は主人を残して全員が召集されていた。一般の居留民も、旗公署職員家族と共に錦県方面に避難疎開してしまい、私は主人と生死を共にする覚悟で、そのまま留まつた。幸か不幸か、私たちは子供に恵まれていなかったの

で、足手まといがなかつた。
頭道營子トウダウエイシの李分会長や本部の人たちに守られて、頭道營子へ移つた。そこは建昌街から約五キロメートルばかり離れたところだったが、そこで約一週間ばかり避難していた。既に匪化していた満警の警察官や満軍の兵隊の一部が、通り魔の如くに村々を荒らしはじめて、あちこちで銃声が鳴

り響いていた。そのたびに、私は李さんの奥さんに手をとられて、高粱畑コウリヤンに逃げ込んでいた。

同じ院子ユアンシ(屋敷内)にある石造りの三間房サンケンフアンシ子は私塾になつていて、二、三十人の子供たちが集まつて来る。壁には日本語の「アイウエオ」の表がまだ貼つてあつた。

うわさによると、ソ連軍の先遣隊が既に建昌に侵攻して来たとのことで、李分会長はさらに奥地に退避することを勧めたが、主人は、「運を天に任せる」と言つて動かなかつた。

翌日、ソ連軍の傀儡かいらいと化した満警隊員が、「建昌に戻つて来い」というソ連軍の命令を伝えるに頭道營子までやつて来た。李さんは折悪しく不在だったが、主人は戻る決心をした。李さんの奥さんは私の手を握つて離さなかつたが、私も主人に従つて迎えに来た人に連れられて建昌に向かつた。

三 建昌に戻つて

「今夕中に、ソ連軍の後続部隊が城内に入つて

来るらしい」という情報が伝わったので、頭道營子のような小さな町でも、速成の大きな赤旗を竿に翻しながら難を避ける女、子供の群れが丘の上に向かつていた。「百姓はかわいそうだなあ」「こうした目に遭いどおしだ。おれたちが市街に進駐したときもこうだった」と、同行していた満軍將校五、六人がひそひそと話し合っていた。この人たちは長城線から撤退して来て、ここで一緒になった人たちであった。

歩調はゆるめられない。ついている警察官が先を急がせるのだった。「早く建昌に着かなければ、後から大鼻子クレービーズ（輕蔑の意を含めたソ連人の意）がすぐに追いついて来る。その前に建昌に行かなければ！」と、寝返り警察官でも、新しい征服者に日本人を引き渡すことは、決して喜んでいないようだった。

「お前はよい人間だ。いろいろ面倒を見てくれて有り難う」と言つて、主人は胸のポケットから万年筆を取り出して渡すと、彼は顔をほころばせ

ていた。

目の前には、いつできたのかと思うばかりの川が流れていて、行く手を阻んでいた。徒歩で渡らなければならなかった。向こう岸にはトラックが一台待っている。

そのとき、横合いから百姓風の若い男が、齒切れのよい声でにこやかな顔をしながら、「事務長と奥さんではありませんか？」と、いきなり私たちに声を掛けてきた。その声に、すぐ主人は「おお！ 君は？」と答えた。青年訓練所を出た、この村の青年であった。ズボンの裾をまくり上げて、「私の手につかまれ」と言っている。私は主人と青年に助けられて、無事に急流を渡ることができた。「謝謝シヤキョウ」と、お礼の言葉を述べた。

トラックは、ソ連軍を迎えるためのものであったが、ソ連軍の進駐が明日に延期されたからとのこと、私たちを乗せてくれた。警察署長の鄭さんが、太った体に背広を着てソフト帽を被った姿で乗っていた。トラックが建昌に入るころには、

もう明かりがともっていた。トラックは、以前旅館だったという家の前に止まったが、その家は障子は破れ放題、畳はぼろぼろになっていた。同行していた満軍の人たちは、知り合いの人がいて互いに苦労話を始めていた。私たちは押し入れの下段に潜り込み、着の身着のままの姿でごろりと横になり、疲れですぐに寝込んでしまった。

四 旧職員の心遣い

潜り込んだ部屋の先が洗面所になっていたので、廊下を通る人々が騒々しく、翌朝は早々と目が覚めた。女の人はいないようだ。午前十時過ぎになって、「全員整列」の声が響いた。集合した場所には、ソ連軍の大佐が正面に立っていた。

一人ずつを前に呼び出して、簡単な調べがなされた。主人の番になっていろいろと質問され、私が妻であることも大佐に明らかにされた。それから所持品検査もあったが、取られるものが多かった。

検査の終わるころに、鄭さんと同僚の白さんが

いつの間にか私たちの後に来ていて、白さんが紙包みをこっそり手渡ししてくれた。油のじつとりとにじみ込んだ香ばしい煎餅チェンビンである。大佐がそれをすぐに見付けて、「今後はいけない！」と言っ

て注意した。

新しい部屋割りが決められ、満軍関係者と私たち協和会関係者は分けられた。新しい部屋は平泉から来た人が主力で、私たちはそこに合流した。

参事官だった津田さんがリーダーで、主人も顔見知りの方が多くていろいろと話し合っていた。つい最近まで建昌にいた福田参事官の顔も見えた。

鄭さんと白さんは、大佐の注意にもかまわずに、私の家からリュックサックなどを持ち込んでくれた。

八月に入ってからには、毎日のように豪雨が続いていて。平泉組の人たちは、平泉から最後の引揚隊として建昌にたどり着き、そこから錦県に向かう途中の川を越すときに、流れの真中で乗っていたトラックが動かなくなり、取りあえず婦女子だ

けを男の人たちで向こう岸に移して、喇嘛寺に収容しトラックに戻ったところを、警察隊に捕らえられたそうだ。

五 髪のを切り落とす

女、ひとりぼっちの寂しき、悲しき、恐ろしきをひしひしと感じはじめた。六十人ぐらいの抑留者の中で、女は私だけであつた。ソ連軍の大佐は、私が女であることをはっきりと知っている。今夜はきつと何かが起きる。明日は、明日の夜はと、忌まわしい光景がまざまざと目に映り、まあまりのつかない思いで頭の中がすっかり錯乱状態になつてしまつた。同勢の中で、ロシア語の話せるたつた一人の磯部さんが、頼みの綱であつた。磯部さんは頼もしげな満軍上尉で、小型拳銃を肌身離さずにとこかに隠しておられると聞いていた。磯部さんを楯にするよりほかはなかつた。「もし私が呼び出されたら、どうか私を撃ち殺してください」と頼んでいた。死に対する恐怖などは少しもなかつた。「そういう事態が起きないよ

うに、未然に防ぐよう最善の努力をします。拳銃は持つておりますが、私にはあなたを打つことは……」と、語尾を濁して主人の方に目を移していた。主人は、「そんな場合には、ひとつお願いします」と、覚悟の言葉を発していた。

しーんと静まり返つた中で、男装を勧める誰かの声が聞こえた。「そうだ！ 私一人のために多くの人に迷惑を掛けることは許されない。男装という方法があるではないか」と頭の中にひらめいた。だんだんと雰囲気落ちて着いてきた私にはよく分かつた。

「男になるわ！」と、主人に向かつて大声を出した。人々の視線が一斉に私に注がれたことを感じた。「それがいい。理髪道具を持っているから、早速やりましょう」と平泉組の中岡さんが言いながら、自分のリュックサツクの口を開けた。電気技術者として在満三十年、人の世の喜びも悲しみもすべて卒業したという感じの方であつた。その声で、私は十八日以降、鏡も見ず、くしも使わず

にただ束ねていた頭からピンをはずした。

中岡さんは鋏を主人に渡したが、主人は受け取った瞬間に一礼して鋏を中岡さんに戻しながら、「お願いします。中岡さん！」と言った。中岡さんもちよつとたじろいだだが、すぐに気を取り直して、「では！」と言つて鋏を取り上げた。

しゃりつと手応えのある音がその場に響いた。うつ向いて頭をちよつと前に出していた私のポーズが、一瞬崩れ落ちるのを意識したが、血の通う体の一部が切り落とされたような苦痛と、悲しさを隠すことができなかった。かつと血潮がわき立つと同時に、ポタポタと熱い涙が膝の上に落ちて、ズボンに水滴がいつまでも残っていた。

一束の髪の毛が手渡されたが、私の物ではないような気持ちで、ただ眺めるだけだった。万一の場合には、これが私の身代わりとして両親の手に届くのかと思ひながら、それを主人に渡した。周囲の誰もが無言で私を見つめていた。長い髪の毛を切ったあとは、バリカンが頭の上を走った。

軽快な音を立てていたが、上気した頭に冷たい風が吹き抜けていた。

すべて私の決心で始めたことなのに、時間が経つと後悔にも似た気持ちにとらわれてきて、両親や妹弟、そして知人の前に立った哀れな自分の姿が目につかぶようになった。

「さあ！ 終わりました」と言う中岡さんの言葉に、はつと我に返った。中岡さんは私の頭を軽くなでていた。警戒のソ連兵も、この間のぞきに来なかった。運がよかったと部屋中の人喜んでくれる。「若返りましたね！ せいぜい中学三年生というところですよ」とか、「それにしても、なかなか美少年ですね」とか、口々にいろんなことを言つて私をからかっていた。

私も、あまりにもあつけなく変わった頭をつくりとなでてみたが、掌に短い毛のざらざらした感触だけが感じられ、女の生命はもうなくなつてしまったと感じた。「元の長さになるまで何年くらいかかるだろうか？」とつぶやいたら、「さあ二

年ぐらいかな？」と、他人事と思って、人々は勝手なことを口々に言っていた。「そんなに？ そんなにかかりますか」と、思わずぶっきらぼうに言ってしまった。

鏡ものぞいて見たいし、さりとて見るのは怖いし複雑な気持ちになっていたが、実際には鏡は持っていないかった。私は落ち着かずにもじもじしていた。中岡さんが、「ひとつ、奥さんによい贈り物をしますかな」と言いながら、差し出されたのは新品の戦闘帽であった。私はそれを受け取りそつと被ったが、しみじみとした温かさが刈りたての頭を覆って嬉しかった。「初年兵が一人できたということ。なかなか似合いますよ」と、微笑みながら中岡さんが言った。

帽子を被ったまま、部屋の一隅ここに壁にくっついて、小さく小さくなるようにして横になった。夜は深々と更けていった。主人は瞼を閉じてはいるが、眠ってはいなかった。ぎっしりと詰め込まれている部屋では、軒をたてたり、歯ぎ

しりをしたりして寝入っている人もいた。

六 男はまずあぐらから

一睡もできずに夜が明けた。目が腫れぼったく少し痛みを感じ、体全体の疲れがひどく感じられた。今日からは男になるための訓練を始めることとしたが、まずあぐらをかくことから開始した。男の集団の中でちぐはぐな感じを与えないための訓練だ。できるだけ人々の陰になるようにして、あぐらをかいて座っていた。警戒兵が回って来たら、口をむすんでいた。

午前中に、ソ連兵の下士官が入って来て一同に起立をさせて、左腕の前に突き出させた。腕時計を残らず取られてしまった。夕方に鄭さんと白さんが、大佐から注意されていたにもかかわらず、白い米で炊いたご飯をいっぱい届けてくれた。食べたいと思っていた餿色の漬物もたくさん差し入れてくれたので、周りの人々にも分けて、一同大喜びで食べたが、血となり肉となる感じが体中を走った。

青年訓練所で配属将校だった李上尉が、小さな行李を我が家から持って来てくれた。その中にはみんなに分けてあげる物もあった。

みんなは、先日の持ち物検査のときに取り上げられた経験と、今日の腕時計強奪に遭ったことで、ソ連兵の正体がよく分かったといつて、それに対抗する方法を考えていた。貴重品と金は、腹巻に縫い付けたり、洋服の肩当てに入れたり、袖口に縫い込んだりそれぞれ工夫をした。女である私にその縫製を頼みに来る人が続々と集まってきた。お役に立つのはこんなときとばかりに、針を動かした。

翌日の昼ごろ、「旗公署前の広場に集合せよ」という命令があった。中岡さんは私に、仕事場で着ていたらしい作業衣を貸してくれた。薄汚い物を上からひっかけて目立たないようにとの心遣いであった。ここは、かつていろいろな催しのあった、思い出のある広場である。

例のソ連軍大佐が現れて、巡視を始めた。私の

前に来たときに立ち止まり、磯部さんと呼んで何か話し合つて去つた。後で磯部さんはそのときの顛末を話してくれた。それは「なぜ髪を切つてしまったのか？」という問いであつたので、磯部さんは「貴軍の暴行をおもんばかつての行為だ」と、はつきりと説明したら、何も言わずに去つたとのことだつた。

七 さようなら建昌よ！

建昌から移動するという命令が出て、各人は荷物をもとめて広場に集まつた。凌源リョウゲンに向かうとのこと。凌源はここから約八十キロメートル離れているが、そこまで行軍とのことだつた。携行する荷物は、特に取捨選択に迷うほどの物はない。少々の下着、非常食用としての炒米、外套と綿入れの支那服、万が一の晴れの日のことを考えて、主人の協和服と私のねずみ色のスーツなどを荷造ろうとしたが、主人から「余計な物は持つな」と注意されて、手放せなかつた白絹一巻きも投げ出した。ただ、目を付けられていたが幸いに今まで

奪われずに持っていた、香水一瓶だけは手放さなかった。何かのときには振りかけて死んでゆきたいとの思いで、雑のうの一番隅に見付からないように隠した。

六、七人のソ連兵に前後を監視されながら、懐かしき建昌を後にしたのは、昭和二十年八月二十六日の午後であった。

赤旗が各戸に立っているが、わずかに開けられた表戸からこつちを見ている現地民は、ひっそりと見送っていた。石を投げたり、ののしつたりすることもなかったが、行く先々で「脱離日本の桎梏、獲得民族的自由」と大きな字で書かれたのぼりが、強く目を射った。

住み慣れて親しくしていた土地の人々との絆が強ければ強いほど、今日のこの苦しみは深く大きかった。ましてや、主人の思いはいかばかりかと思いをさせた。その主人の肩に、無言でコートをかける中岡さんの情が、私の脳裏に強く焼きついていた。

八 みじめな行軍

以前ならば、バスで二時間ちよつとの優良道路が、降り続く豪雨のために随所で破壊されていた。橋は流され、川沿いのところは決壊して川底になっていて、残っている部分の土は流されて、砂利だけが残っていた。

流されないように主人と手を組みながら、少し上流の方に向かって歩き出す。足もとの砂が崩れて盛りあがり、地下足袋の中に入り込んでくる。「つまずいたら流されてしまうぞ!」。ただ夢中で

足を動かす。流れが急なのでしぶきがあがり、体もびしょ濡れになってしまった。やつとのことで向こう岸に着きやれやれと思うと、すぐに監視兵が馬に乗ってやって来て私たちを追い立てる。地下足袋に入った砂を出すのが精いっぱいだった。

幾度川を渡ったことだろう。濡れどおしでふやけてしまった足。今度は砂利道での行軍が始まった。土ふまず以外の足裏は全体が腫れあがってしまい、痛いなどという生易しいものではなかつ

た。しかし、落伍することは死を意味することなのだという考えが、足だけを機械的に前に押しやっていた。

やっとのことで、宿と決められていた現地人の家に着き、温突オンドルの上に座って濡れた靴下を脱ぎ、救急品袋からヨードチンキを出して塗る。飛びあがらんばかりの痛さを我慢した。荷物の重たかった主人は、私よりずっとひどかった。これでは明朝の出発が思いやられる。主人は、濡れた外套を絞ったり乾かしたりしていて、休む暇がなかった。

薄汚れた温突の上に綿入れの支那服にくるまつて、抱きあわんばかりにして一夜を明かした。

次の日は幸いに晴天だった。じつとりと濡れている服の上から激しい日照りに遭うと、ひどく蒸し暑くなり疲れが倍加して、くたくたになってしまふ。「ここで死んでしまいたい。とてもこれから先は歩けない！」と、主人に訴えながら泣けてきた。大きな石に腰を下ろした私は、どうしても

体が持ち上がらなかった。後ろの人がどんどんと通り過ぎ、私たちを追い越していった。そのうちに、どこから探して来たのか、主人は急造の杖を持ってきて私に握らせた。

日はもうとつぷりと落ちてしまった。先頭の人「おおい！ おおい！」と言って、暗闇の中から元気づけてくれた。監視兵もやっと宿泊場所を探せと言い出した。部落の犬が一斉に吠え出した。

案内された部屋の温突は、今まで誰かが寝ていたらしかったが、姿はなかった。みすぼらしい太々タイタイ（奥さん）が、食事の準備をしてくれた。明かりを消すと、南京虫がぞろぞろとはい出してきて、首筋や手首を噛んでいた。疲れ切った体では追い払うことも思うにたらず、悩まされて熟睡するどころではなかった。

翌朝は早々に出発した。心ばかりのお金をお礼として置いて行った。監視兵がどこからか荷馬車を徴発してきて、みんなの荷物を積み、その上に

私たちを乗せてくれた。凌源に近づくに從つて道は平坦になつてきた。

凌源の手前の川は水深が深く、しかも濁流で渡渉は困難であつた。監視兵が馬を貸してくれた。

馬に乗つたことのない私は、やつと押し上げられて鞍に取り着いたが、腰が落ち着かない。振り落とされそうになつて悲鳴をあげた。「たてがみにつかまれ。離すな！」と、手綱を取つている主人が怒鳴つた。腹ばいのようになつてたてがみを必死に握つた。馬の腹に当たつてゐる水音がものすごい。馬の体温が不気味に両足に伝わつてきた。

「前を見ろ！ 下を見たら目を回すぞ！」とも言われたが、どうにか夢中で渡り切つた。向こう岸で馬から降りて歩いていると、監視兵の一人がいきなり私のポケットに手をつつこんで、小出しにしてあつた五百円ばかりの小銭を持って行つてしまつた。

誰もがそんな目に遭つていたが、中にはまともつた金を奪われた人もいたようだった。

目の前に友軍がいて、今まで少人数で恐怖心を持ちながらここまで無事にやつてきたので、気がゆるみ出したのだろうが、そんな彼らがつくづく憎くなつた。

凌源の城門をくぐり抜けて市街地に入つた。市街は比較的に平静であつた。饅頭笠の青年が、つと主人のかたわらに寄り添い、二言、三言話をして離れて行つた。主人の話では、「十五里堡分会の人で、凌源地区の分会長や副会長もどこかに身を隠したそうだ」とのことだった。以前、副分会長の李さん宅に招かれてごちそうになつた、棗なつめの天ぷらを思い出して懐かしかつた。

高い石垣に囲まれたところに、「解散軍人收容所」という真新しい看板が掛かつてゐる建物に入つた。收容所に入る前に、この長らしいソ連軍の将校によつて所持品検査があり、私が大事にここまで無事に持つて来た香水も、あつと思ふ間に奪われてしまつた。

部屋に入つて早速に足の手入れをし、ヨードチ

ンキを塗った上に肝油軟膏をつけ、ぐるぐると包帯を巻いたら、もう一步も歩けなくなつた。みんなもひどい足をしていて、軟膏を塗り合つた。

夜の点呼では、建昌で別れた満軍の旅長が指揮をとつた。点呼が終わつて解散した後で主人を呼び止めて、「お前のことをいろいろと心配していた。また、ソ連側から大分しつこくお前のことを尋ねられたよ」と言つたそつだ。ここではゲーペーウーの調査もあつて、翌朝から逐次呼び出されて調べられていたが、どうしたことか主人は呼び出されなかつた。私たちはとうに覚悟ができていたのだが、何かあつたのか分らない。

ここで私たちのグループに四人の抑留者が加わつた。承德から錦県を直指して避難行動中に、ソ連兵に捕らえられたとのことだ。捕らえられる前には現地人の暴徒に襲われて、所持品はもとより着ていた衣服までもはぎ取られてしまい、憐れな姿をしていたので、グループの人々から少しづつ物を出し合つて慰めた。

九月二日、通訳をしている青年がやつて来て「ミカド！ ミカド！」と大声を出しながら、右手で何かを押すしぐさを繰り返していた。「そうだ！ はんこを押したと言つてゐるんだらう」と誰かが言つたら、やつと通じたとばかりに、その青年はにっこりと微笑した。何か協定ができたようだった。

それから二日後に、汽笛が鳴るのを懐かしく聞いたが、不通になつてゐた錦古線が修復されて開通したらしかつた。

翌日、凌源の収容所を出て駅に向かつた。凌源駅は大混雑をしていた。私たちは無蓋貨車に詰め込まれて東に向かつた。「これで熱河ともお別れだ。さようなら喀喇沁左旗。さようなら喀喇沁左旗」と、口の中で幾度も幾度もつぶやいた。

九 それからの行動

私たちは、一路東へ東へと移動した。無蓋貨車から有蓋貨車に乗り換えさせられたり、さらにまた某駅から無蓋貨車に再び乗り換えたりで、言わ

れるままのあてもない行動であった。錦県―綏中―再び錦県に戻り、そこから義県―平泉に行つた。途中で貨車から降ろされて行軍をしたこともあり、野宿もしたが、寒さがだんだんと厳しくなり、筆舌に尽くし難いつらさであった。

平泉からは、監視兵が交代して蒙古兵となった。葉柏寿から錦州に向かったが、なぜか奉天（瀋陽）、新京（長春）は通過してしまった。ハルビンでいったん留まり、約一週間は収容所での生活を強いられた。

しかし抑留行動はさらに続き、ハルビンから満州里に行き、そこから蒙古領に入つてチタウナホシカウスへバートルウタール、そしてウランバートルにたどり着き、そこで収容所に入れられた。

十 女と見破られない苦勞

どの車両にも、進行方向を背にして一段高いところには監視兵が銃を持って座り、私たちを監視していた。ウランバートルの駅では、二人の逃亡

者がいた。終戦前に鉄道警護隊にいて、このあたりの地図を持っていたとのことだった。それから監視が一層厳しくなってきた。

私は、この抑留行道中、一同の被護があつて、疑いを持たれることもなく男のまままで無事に過ごすことができた。でも苦しかった。垢じみた訓練服に戦闘帽を被つて、かつこうは兵隊と同じだったが、うかつに口をきけばすぐに女と分かつてしまふ。男ばかりの中だったので、話すことなど特別にありはしないのだが、意識して話をしないのも随分とつらいことであつた。

こう考えると、いつまでも男で通すわけにもいかないだろうと思うようになった。明日にでも、どこかの作業場へ送られるかも分からないのだ。そうなつたならば、どんなにうまく繕つても見破られることは間違いない。それに私自身も、もう自然を偽る苦しさには耐えていけなくなつていた。

主人と相談して、女であることをはっきりと申

し出ようと決心していた。女と分かったときにどんな扱いを受けるか、すべて運命に任せようと思つた。夕食後、こつそりと主人に決心を打ち明けた。主人は、「おれも前から考えていたんだ。

移動中のあの殺伐とした雰囲気の中では、どんなことが起こるか分からなかつたが、ここまでくればもうそんな心配はないだろう。おれも機会をねらつていたので」と言つた。そう言われて、私も少しは気持ちが悪くなつた。

十一 転機、女に戻る

翌朝、蒙古側から衛生部隊編成の命令があり、私たちのグループから堀井先生がメンバーに加わることになつた。私たちの事情をつぶさに知つてゐる先生は、主人を薬剤師、私はその助手ということでメンバーに入つたらと、勧めてくれた。先生は、「ちよつと勉強すればできることですよ。僕がついて行くんだから心配しないでよい。それに病院ではそんな専門のこと以外にも、事務とかその他いろいろな仕事があるんですから、そちら

の方をやつてもいいんじゃないですか」と親切に言われ、グループの人たちも「それがいい。そうなさい。病院に行けば奥さんに会えると思えば、私たちも安心できますよ」と勧めてくれた。主人と相談したが、主人は偽ることの苦しさ、ましてやそれが人の命を護る仕事であることについて、主人なりに悩んでいた。

蒙古側でも事情は知つてゐるようだし、会見さんという専門の薬剤師もいて、仕事のうえで心配なさそうだと分かつたので、お願いすることになつた。これからはすべて先方任せだ。

名簿を出して一時間も経たないうちに、ソ連軍の将校が呼んでゐるとの連絡が入つた。私は、昨日の行軍で足を痛めてしまったので、びっこをひいて主人の後に従つた。まぶしいほどきらびやかな軍服の、ソ連軍将校を中心に四、五人の蒙古軍将校たちが待ちかまえていた。日本側の指揮班がゐる部屋の前庭である。「女の身でなぜここまで来たのか？」と、ソ連軍将校の言葉を、平泉以来

の顔見知りの小林さんが通訳した。私は、そつと主人の顔を見た。主人が「これは私の妻だ。建昌において貴軍の大佐は、女であることを認めて抑留した。緩中に移送されたときも同様であった。平泉においては蒙古軍將校が、我々は日本に送還されると明言していた。それで、貴軍及び蒙古軍將校の言葉を信じて我々は行動したのである」と、やや緊張した面持ちで答えた。それに対しては何の答弁もなく、彼ら同士でひそひそ話がされて、ややしばらくしてソ連軍將校は私の方に向き直って、やおら言った。「二人共、ウランバートルの中央病院で働くように取り計ろう」と言い、私の充血した目を見て「その目も、病院に行ったらよく治すように」と、やさしい言葉で言った。すっかりしなげな思いつつ、やっと自分を支えていたものが崩れていくのを感じ、涙を見られまいと急いで面を伏せた。明るい気持ちで部屋に戻り、皆さんも話を聞いて喜んでくれた。張り詰めていた気持ちが緩み、今さらのように惨めな身

の回りが気になってきた。

中央病院というからには、ソ連や蒙古の女もたくさんいることだろう。その中に混じって働く私は着るものもなく、まず第一に髪はすぐに伸びない。やつとこのことで女に戻れた喜びは、また女ゆえの悲しみに移っていった。

衛生部隊員は別室に集合という命令で、建昌以来お世話になった皆さんと別れる悲しさと、移送途中の様々な思い出の交叉する中を、心からお礼を述べて、堀井先生たちと新しい宿舎に向かった。

宿舎は倉庫の右端だった。その夜、宿舎の奥まったところで一人の通夜があった。たそがれどきに若い兵士が自殺したそうだ。形ばかりの祭壇にはろうそくの火が揺らぎ、応召した僧侶の人が、汚れた軍服姿で読経をしていた。物悲しい情景であった。

十二 憩いの家

私は丹念に体を洗った。シャボンの泡に包まれ

ながら、今まで心の隅々にしつこく宿っていたかたくなさが、次第次第に消えてゆくような気がした。部屋中に湯気がもうもうとしていて、シャワーの栓をひねるとお湯が豊富に流れてきた。

きれいな白衣、ルパーシカ風の上衣と、ゆったりしたズボンが用意されていた。導かれるまま明るい階段をのぼると、No.3と書かれたドアがあった。そのドアを押して中に入ると、テーブルの上には食器が並べてあった。堀井先生が、「ちよつとホテルに来た感じですね!」と言われた。私もまったく同感であった。白パン、米の粥、紅茶には砂糖と思いがけないごちそうで、太ったソ連人らしい炊事婦が愛想よくお代わりを勧める。牛乳もたっぷりあった。久しぶりに腹いっぱいになり、幾月ぶりかで人間らしく白い敷布のベッドに寝た。主人は庶務の仕事、私は薬剤師の会見さんの助手と決まった。

当初十人ぐらいたった患者も、そのうちに二百人、三百人と増えて、ときには五百人を超すこと

もあった。病院勤務員も、いつの間にか定員百五十人となった。主人は庶務の責任者になり、諸事大忙しの毎日となった。かつての仲間だった人の中からも、入院する人が増えてきた。平泉からスヘバートルまで一緒に行動した、林西県の中尾県長さんも運び込まれたが、赤痢のほかに両足が凍傷にかかり、脳症もおこして、間もなく亡くなった。

「入院何名、退院何名、死亡何名、現在員何名、異常ありません」と、毎朝日直医と本木部隊長に報告する。そのたびに、「ああ! 今日もか」と嘆息した。多い日には、死亡者が十人を超すことがあった。朽木が崩れるように働き盛りの二十歳代、三十歳代の人がもろくも死んでいったが、運命のはかなさが今さらのごとくに感じられた。

十三 引揚げ近づく

十月の十日ごろだったと思うが、二百人近い日本人の患者が一度に退院を命ぜられて、直ちにウランバートルに向かって出発した。退院を命ぜら

れた患者は、病衣を返還して各自の今までの服装に戻った。重症患者のために、輸送中に必要とする医薬品も用意された。十二日には三、四人の医師と、勤務者の大部分も出発を命ぜられた。

昭和二十二年十月二十四日午後、私たちも満二年を過ごしたタタールの思い出深い宿舎を出て、集結地のガンドンに向かい、そこで一泊した。翌日の午後にはスヘバートルに向かった。スヘバートルでは、ソ連軍のゲーパーウーによって紙という紙を全部取り上げられて火の中に放り込まれた。

主人は内蒙古の通訳に何か言っていたが、素早く死亡者台帳一冊を引き抜いて私に投げてよこした。私も、何食わぬ顔をしてそれをリュックサックの奥に押し込んだ。遺髪の包みも手に入れることができた。

その後さらに移動して、ナホシカで一泊した。翌日、早朝早く起こされて、すぐに列車に乗せられた。有蓋貨車であったが、中が二段に仕切られていて中央にはストープも据えつけてあった。

十四 引揚げ

十一月八日の夕暮れにナホトカに着いたが、この長い有蓋貨車での生活は苦しく、一緒に引き揚げることを楽しみに励まし合ってきた四人の同士が車中で息を引き取り、そのつど名もないような小さな駅で降ろされて、異国の土に埋められた。

ナホトカでは海岸で野営させられた。真つ赤な日の出が、故国の方向から昇ってきた。「お母さん！ もうすぐに帰れます。ここまでやっとたどり着きました」と叫んだ。しかしすぐに乗船できずに、数日間寒気の厳しさを増す海岸で留められた。

やっとトラックに便乗して波止場に行き、岸壁に繋留されている「大拓丸」に乗った。昭和二十二年十一月二十三日だった。

その後は順調にいき、舞鶴に上陸した。主人は、大事に持って来た死亡者台帳と遺髪の袋を、引揚援護局の担当官に渡した。これで主人の任務も終わった。

戦後の生活再建も、生易しいことではなかった。主人は出版業に従事することを考えていたが、野崎産業株式会社に関係し、そこで全智全能を發揮して働き、昭和五十八年十二月に、その波乱な人生に終止符をうった。

私の人生の前半も波乱に富んでいたが、後半になって、やっと平和のありがたさをしみじみと味わえるようになった。

追憶！ 開拓の花嫁から避難行へ

栃木県 星 初 枝

私は、当年八十八歳になります。目も足も不自由なうえ記憶も定かではありませんが、何とか元気なうちに渡満前後の経緯を書き残しておきたいと思っています。

私は、栃木県出身の星長男のもとに嫁ぎましたが、星長男は国策に従って、第一次武装移民とし

て満州国の弥栄村イサカムラに入植していました。

昭和十（一九三五）年ころは不景気のどん底で、農村では肥料を買う金もなく、田畑を売って生活費にする農家もあるような時代でした。私は、八人の兄弟、姉妹の長女でした。年ごろになったあるときに、私にはもつたないような資産家からの縁談がありました。家の事情を考えると、とても応じられない気持ちでした。

そんなとき、近くに住んでいる従姉妹が訪ねて来て、「満州へお嫁に行かないか？ 旅費はお国から八十円出るし、所帯道具は何も要らない」という話をして下さり、すぐに、「ああ、これだ！」と思いました。早速、従姉妹と一緒に申請書を書いて、親の実印を無断で押して、宇都宮の軍司令部に郵送してしまいました。書類が届いたのでしよう。お巡りさんが身元調査に来たので、両親は何事かとびつくりしましたが、私の説明でようやく事情が分かり、お巡りさんの前で厳しくしかられてしまいました。